僕が好きなあの子の秘密2

――――告白した少女からもらったSDカード。
そこには想像も出来ないほど淫靡な彼女の姿を映した
動画が入っていた。

僕はディスプレイに映し出される想い人の痴態に
我を忘れ、食い入るように動画を見続けた。

AVのさながらの彼女の淫らな独白が終わり画面が切り替わる。
そこには彼女が「ご主人様」と呼んでいる男が現れた

――――ユウキ君。

そこに現れたのはよく知るクラスメイトの姿だった。

じゃあ、これからご主人様に私のケツマンコ一杯可愛がってもらうので、よく見ていてくださいね♥
淫猥なセリフを口にしながら、彼女は肩を抱く男の陰部に指を這わせ、弄ぶように軽い愛撫をする。
彼女の手の中にあるユウキ君の陰茎は、まだ勃起していないだらりと垂れ下がった状態ですら、今ガチガチに勃起している僕のペニスより遥かに太く大きかった
くにっ
くにっ

ほら、ヤミ。カメラ見て何か言って。
んちゅ
レロレロ
あっ♥んちゅ、ぷあっ・・・今、私はぁ・・・これから私を一杯幸せにして下さる、ご主人様のオチンポに・・・はじめる前のご挨拶と感謝のチンカス掃除でご奉仕しているところです♥

二日風呂に入ってないから
匂いも味もすごいだろ
はい♥私の大好物の
こってり味の濃いチンカスと
脳がしびれるようなチンポの匂いで
体中が発情しちゃいます♥
ペロ…
ペちゃ…
ペろ…
ゥうぉぉぉ…♡

しばらくすると執拗な口戯の刺激で、陰茎がそそり立つ。それを確認した少女はゆっくり口を離すと、凶悪な怒張を慈しむかのようにうっとりと見つめた。

ギュー
ギュー

ちゅぷ

あぁ・・・♥いつもどおりとっても素敵・・・♥

・・・さぁ、ヤミは次はどうしてほしい

はい♥ヤミのご主人様専用のケツマンコで、素敵なオチンポにたくさんご奉仕させてください♥

今からご主人様に私のケツマンコ、バックからガン堀して頂きます♥
一杯ケツイキしちゃう恥ずかしい私の姿、よく見ていてくださいね
ドキドキ

ビクッ
ぬちゃっ
お・・・ぉ♥オチンポ来る♥
ご主人様のぶっといカリ首がヤミのケツマンコ入ってきてます♥
ゾグッ
ゾグッ
ぬるぷぷ…

いきそ…!!

おっ!
おっ!
ズンズンズンズン

ア♥ア♥ア♥イクッ
ケツアクメきちゃう！♥

あッ♡
イグっ♡
ビクン!

ちゅ♡
レロオ♡
フゥー…
フゥー…
ビクンビクン
とろぉ

カメラの前での濃密な後戯の後
二人は奥にあるベッドに移り
再び行為を始める。
ユウキ君の凶悪な陰茎を
彼女はその小さな体で苦も無く
受け入れると、ゆっくりと
カメラに顔を向け妖艶な
笑みで微笑んだ。
――――そして、彼女がカメラに
視線を向けたのはそれが最後だった
ぬるぷぷ…

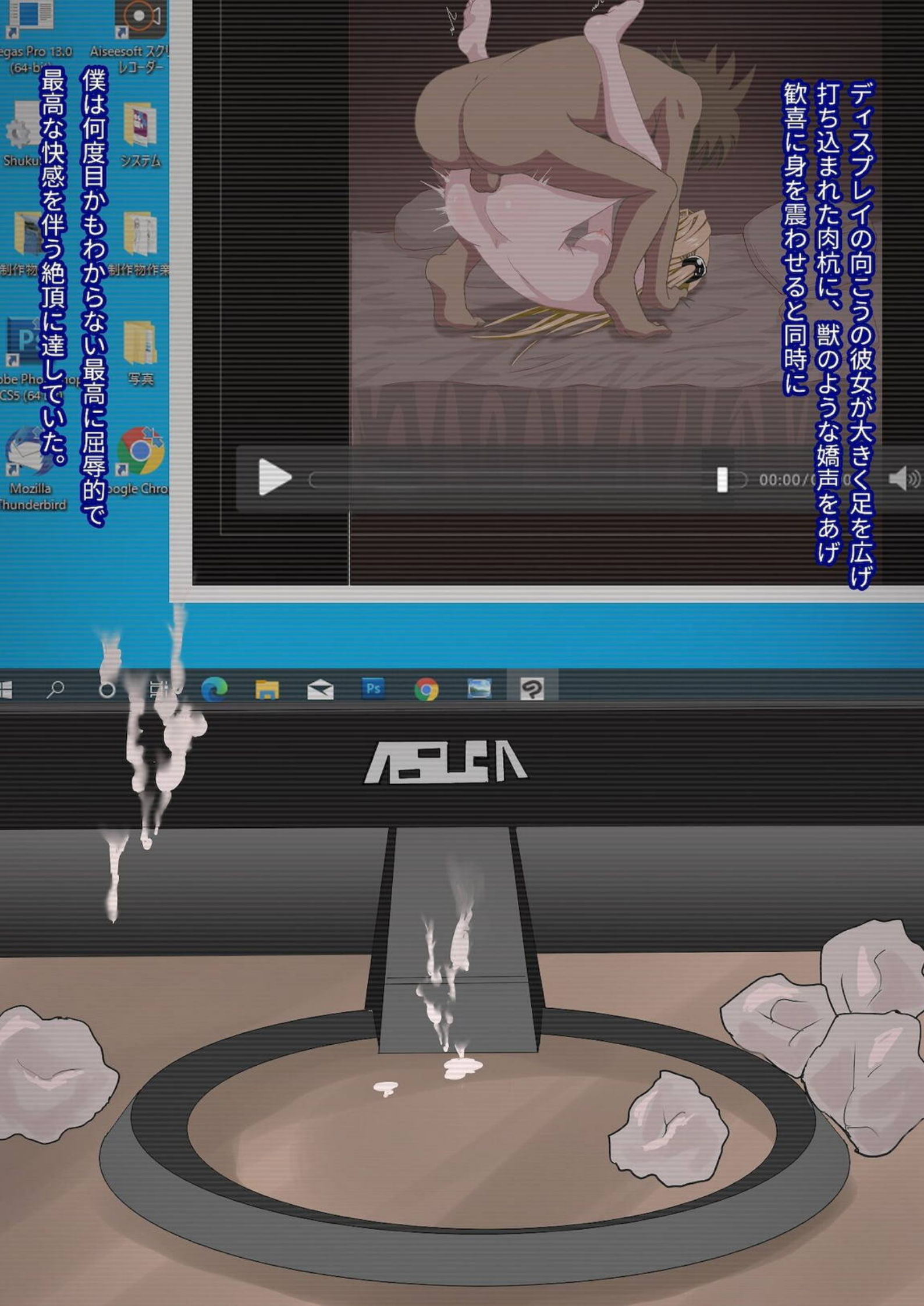
行為が始まるった後、
彼女はただただ快楽を貪る
獣となった。
あッ♡
あッ♡
すゴッ
ずぐッ
ずぐッ
ずぐッ
ずぐッ
ビクッ♥ビクッ♥
ハァ♥
ハァ♥
ギッギッギッ

あぁん♡
あぁっ♥クリ責めらめぇ！今されたらすぐクリイキきちゃう
あ♡もう♡ダメェェ♡ひぐぅ♡
ビクッ♡ビクッ♡
くりくりくりくり
ビクッ♡ビクッ♡
コプッコプッ

んあッ♡
あん♡
はぁ♡
はぁ♡
ぶぢゅぢゅ♡
ぶぢゅぢゅ♡
ぶぢゅぢゅ♡
ぶぢゅぢゅ♡
ぬぬ
ぬぬ
はあああん♡
すごいのお♡
ギッギッギッ

あん♡
あッ♡
あッ♡
あッ♡
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
きてッ♡きてぇ♡!!
ギッギッギッ
ギッギッギッ

ビクッビクッビクッ
ドビュ
ビュッブッ♡
ぼっ
あ♡
イクッ
イクッ


ディスプレイの向こうの彼女が大きく足を広げ
打ち込まれた肉杭に、獣のような嬌声をあげ
歓喜に身を震わせると同時に
僕は何度目かもわからない最高に屈辱的で
最高な快感を伴う絶頂に達していた。

翌日、全身の倦怠感を押して登校する。
彼女に会ったらどんな反応をすればいいのか
ぐちゃぐちゃの思考回路で思案していたものの
答えは出なかった。

思考はまとまらなかったが幸いクラスの違う
彼女を朝見かけることはなかった。

何となく、ほっとしたのも束の間、
僕は机の中にある手紙に気付いた。

「放課後、また教室にきて」

まぎれもない彼女の字に僕の心臓は
早鐘をうった。

放課後空き教室で待っていると彼女は音もなく現れた。
動画で自身のあられもない姿を僕に見られていることは想定しているはずなのに
普段の彼女と変わらない、平静で物静かな態度だった。

いくらでも聞きたいことはあるはずなのに言葉にならない。
しかし彼女からは口を開かず、僕は小さく深呼吸をしたのち
意を決して声を発した

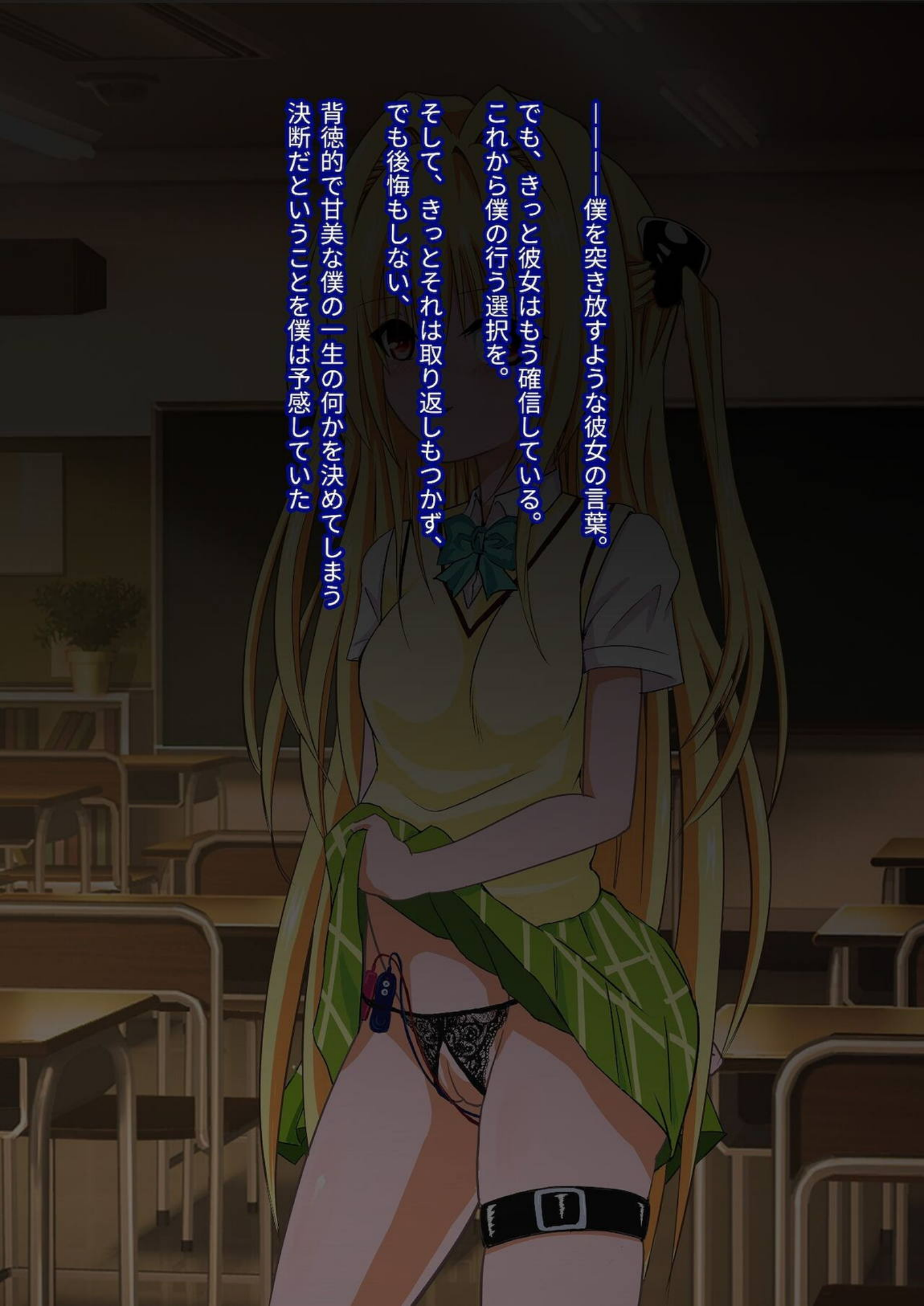
僕の言葉を遮るように彼女が笑みを浮かべながら話す。
なんの躊躇もなく僕に対して自慰に関して質問する姿に
動画の彼女がまぎれもなく目の前の少女と同一人物なのだと
思い知らされた。
予想外の質問に僕が口ごもると彼女は言葉を続けた

ふふ、まぁいいわ。
あの動画を見てもらったら
わかると思うけど私はもう
彼のものなの。
だからあなたの
想いには応えられない。
――なら、何でわざわざ
あんな動画を・・・
私は、彼・・・ご主人様のもの。
だから、あなたから告白されたことも
きちんと報告したの。そしたら
ご主人様はこうおっしゃったわ
「恥ずかしい姿を見られて
興奮するお前には有用なやつじゃ
ないのか」って

だからあの動画であなたを試したの
想い人の私が抱かれているところでも
それを見て悦べるか。「素質」がある
のかを。
つまり、「ただ私たちの行為を見る役」
という形で私達のプレイのメンバーに
加わらないかという勧誘よ
見られるのが好きな私と
見るのが好きなあなた。
この関係が明確にできれば
お互いいい関係になれるでしょ

要約すると、あなたの恋人にはなれない。でも、あなたが希望するなら、私がご主人様と色んなプレイをしているところを見るだけの権利を得ることができる
勿論相応のルールには従ってもらうけど、好きな女の子がえっちぃことしてる姿を生で見れるのよ。興味ないかしら♥
そうそう、もう一つだけ教えてあげる。
――彼女のいわんとすること何となくは分かったが頭は真っ白で言葉が出ない。しかしこの状況に自分でも気付かないうちに僕の股間は盛り上がり一見してわかるほどズボンを大きく持ち上げていた。彼女はその股間の反応を楽しむように一瞥して微笑むと言葉を続ける

――――僕が息をのむ。
彼女はスカートの前裾をまくり上げ、自身の秘所を僕にさらす。
彼女の秘所は下着とはとてもいえない、ただただ男を誘惑するためだけのレースの生地で飾られていた。その腰紐には明らかに卑猥な玩具のリモコンが差し込まれそのコードは彼女の股間へと消えていた。
あの動画はうぶなあなた向きに普通のプレイに終始してたけど、普段はあんなものじゃないわ
私はご主人様にされることは全て悦びなの。露出でも、被虐でも、羞恥でも、スカトロでも、全て心から幸福と快感を得られる。
だから、強い刺激をもとめて、どんどん過激で変態的になっちゃうの。今回の提案もその一環。だけど、勿論強制はしない。生半可な考えならやめておいたほうがいいかもね。
ひくひくっ♥



――――僕を突き放すような彼女の言葉。
でも、きっと彼女はもう確信している。
これから僕の行う選択を。
そして、きっとそれは取り返しもつかず、
でも後悔もしない、
背徳的で甘美な僕の一生の何かを決めてしまう
決断だということを僕は予感していた